

バルザックとギロチン

Balzac and the Guillotine

泉 利明

ギロチンと文学

人を殺すときに、わざわざ首を切りおとすというのは、きわめて人間的な行為なのだろう。生き物のなかで、首を切って死に至らしめたり、死者の首を刎ねるのは、人間だけであり、頭部の象徴性を理解できるのも人間だけである。斬首による死は、死の単なる一形態ではない。殺す側は、相手の死を望んだだけでなく、何らかの過剰な、これ見よがしの意思を示している。また切りとられた頭部を見る者は、普通の死体に接するときとは別の、より複雑な感情を抱かざるをえない。

斬首という主題は、十八世紀末以降のフランスにおいて、ギロチンの考案と、それを用いた大量の処刑と結びつく。ギロチンとは、首を切ることをのみを目的とした異様な物体である。それは人々に恐怖心を与え、またその好奇心をそそった。絵画、文学、そして音楽までもがギロチンを素材として取りあげたのは、それが容易に何らかのドラマを設定し、作品を受けとる者の感情に強く訴える力を持っていたからだろう。では、バルザックという小説家は作品のなかで、この物体をどのように扱い、またそこにどんな視線を投げかけていたのだろうか。この点について考えてみたい。

ギロチンは、十八世紀末の時代精神と深くかかわっている。それは、処刑をいっそう残酷なものにするために作られたのではない。事情はむしろ逆である。医師であり、立法議会議員でもあったジョゼフ・イニャース・ギヨタンの主張は、「迅速かつ無痛の死刑の方法を見つけ出さねばならない」⁽¹⁾ということであった。ミシェル・フーコーが『監獄の誕生』の冒頭で、ルイ十五世を殺そうとしたダミアンの処刑について書くように、かつての処刑のほうが、はるかに凄惨であった。ギロチンのおかげで、一瞬にして絶命できるようになったのである。バルザックは『現代史の裏面』で、「ギヨタン医師が、博愛 (philanthropie) の目的で作った刑罰」(VIII, 311)⁽²⁾と書き、「無実で、不幸で、迫害された公証人のチャンピオン」と題された文章では、こんな風に述べる。

ルイ十五世の時代には、(…)車の刑に処したり、四頭の馬で引き裂いたりしていた。時には受刑者が、激しい熱に襲われ、四肢が碎けて垂れさがり、二十四時間、車輪の上でうめき声を上げつづけた。死刑執行人はとどめを刺すために、許可が出れば受刑者の首を絞めようとした。しかし革命のおかげで、われわれにはギロチンがある。今では、復讐としてではなく見せしめのために、人殺しや偽金作りなどの首をごく簡単に刎ねる

のである。親殺しの場合は、さらに手首まで切り落とされる⁽³⁾。

また剣による斬首は、貴族階級のみ認められていた「特権」であり、平民は絞首刑に処せられた。バルザックはこのことを、『エル・ベルドゥゴ』（スペイン語で「死刑執行人」を意味する）で利用している。「絞首台が立つのを見た侯爵は、自分の家族に対しては処刑のやり方を変えてほしいと希望し、貴族の首を刎ねるように求めています。」(X, 138) ギロチンによって、すべての死刑囚にたいして「平等」に同一の方法が適用されるようになったのである。

時代とギロチンをつなぐもうひとつの大きな関係は、ルイ十六世がこの装置で処刑されたということである。ジュリア・クリステヴァは『斬首の光景』で、国王の処刑の意味をこう説明している。「錬金術の実験にならって、斬首は秘教的な意味で、必要なもの、新たな頭部、新たな時代の出現のために欠かすことができないものとなった。」⁽⁴⁾ ギロチンによる処刑は、フランス革命期にはひとつの見世物となっていた。アンシャン・レジームの終焉は、国王の死によってというよりも、大勢の人々が目にした、その切断された頭部によって象徴されたのである。

このような死刑は、十九世紀以降のフランス文学にとって、避けてとおることのできないテーマとなる。では、小説のなかでギロチンによる処刑は、どのような形で姿を見せるのだろうか。まず、現実におこなわれた死刑執行について言及する作品がある。あとで見ると、バルザックの『恐怖時代の一挿話』は、ルイ十六世処刑の後日談である。デュマの『ピロドの首飾りの女』には、デュ・バリー夫人の処刑の様子が描かれている。また多くの作品では、登場人物に死刑という運命がふりかかってくる。ギロチンによる処刑は、まったく非日常的でありながらも、やはり普通の人間にも生じうる出来事であった。そして、バルベール・ドールヴィイの『断頭台の秘密』のように、斬首後にも意識が残っているかという特異な題材を扱うものもあるが、多くの場合、物語は登場人物の処刑に向かって進む。スタンダールの『赤と黒』やユゴーの『九十二年』では、最後に主たる人物が処刑され、同じユゴーの『死刑囚最後の日』やカミュの『異邦人』は、死刑の手前で物語の幕が閉じる。

では、バルザックの小説において、処刑とともに何が起きているのだろうか。それを検討するにあたり、本論では、単なる斬首とギロチンによる処刑を区別し、後者のみを対象としたい。バルザックの、特に前期の作品において、切りとられた首、あるいは首を切りおとすという行為は、いくつもの作品に登場している⁽⁵⁾。『不老長寿の霊薬』の最後では、ドン・ジュアンの頭部が切りはなされ、修道院長にかじりつく。『田舎医者』では、村の人々の夜の集いで「勇敢なせむし婆さん」の話が出て、殺人によって切断された首について語られる。先に触れた『エル・ベルドゥゴ』では、家系を存続させるために、長男が死刑執行人となって、家族の首を刎ねる。斬首の最も血なまぐさい表現は、『ふくろう党』におけるギャロップ＝ショピーヌの処刑の場面であろう。

二人のふくろう党員は、またギャロップ＝ショピーヌをつかまえ、ベンチの上に寝かせた。彼はもう、動物的な恐怖の本能によって、痙攣的に体を動かす以外には、何の身ぶりも見せなかった。最後に、くぐもったうめき声を何度か上げたが、肉切り包丁の重々しい音が響くと、すぐにそれは止んだ。頭部は一撃で切り落とされた。マルシュ＝ア＝テールは、髪の手をつかみ、頭を持ち上げて、小屋から出て、荒削りの戸の縁枠の上に一本の大きな釘を見つけると、そこに髪をまきつけ、血まみれの頭をつるして、目も閉じてやらずにおいた。(VIII, 1176-1177)

これも、ある種の処刑であるにはちがいない。しかし、ギロチンによる処刑は、激情にかられての首の切断ではなく、法的な制度として実施されている。ギロチンを媒介とすることによって、怒りや憎しみといった個人の感情を越えて、より広い社会的なものが物語にまわりついてくるのである。絵であれば、ギロチンだけを取りだして描くのも可能だが、小説にこの装置を導入するとき、同時にさまざまな要素が持ちこまれる。処刑囚はどんな人物なのか。いかなる罪を犯したのか。死を前に何を考えているか。周囲の人間は死刑囚とどう接しているか。死刑はいかに執行されるのか。死刑という制裁は、はたして正当なのか。処刑の物語が成立するには、こうした点にかかわる言及が必要なものであり、それはバルザックが描こうとした人間や社会の重要な側面となっているだろう。

死刑執行人

一八三〇年、バルザックはレリティエ・ド・ランとの共作で、『革命期の犯罪に対する死刑執行人サンソンによる、フランス革命の歴史に役立つための回想録』を刊行する(以下、本書を『サンソン回想録』と略記する)。バルザックとギロチンという問題を考えるうえでまず見のがせないのが、家系として死刑執行を宿命づけられたサンソンとりわけルイ十六世の死刑執行人となったシャルル＝アンリ・サンソンに関する記述である。

『サンソン回想録』において、どこがバルザックの担当部分かを特定するのはむずかしい。この点で重要な資料となっているのが、バルザックの死後、バルザック全集の出版を考えていたエミール・デュタックに宛てて、マルコ・ド・サン＝ティレールが一八五二年一月二三日に書き送った、長い手紙である⁽⁶⁾。

「私はレリティエ・ド・ランをよく知っており、『サンソン回想録』への彼の文学的寄与を常に見てきたので、この共作のなかでどこがバルザックに帰属し、どこがそうでないかを示すことができる」⁽⁷⁾とサン＝ティレールは書き、細かくページ数を記しながら、バルザックの執筆箇所を指摘している。しかし、バルザックが何も認めていない以上、この証言をそのまま信じるわけにはいかない。『サンソン回想録』は小説仕立てではなく、事実としてサンソン本人が語るという体裁をとっているため、青年期の作品以上に、バルザック的な部分が見えなくなっているような印象を受ける。

確実にバルザックの文章とみなせるのは、『サンソン回想録』に先だち、一八三〇年一月二九日と二月四日に『ル・キャビネ・ド・レクチュール』に掲載された「序論」である。

これがのちに修正を経て、『恐怖時代の挿話』として、『人間喜劇』の「政治生活情景」に含まれる一篇となる。

また、『サンソン回想録』の第一巻十二章から十四章までが、一八三九年十月に、「二人の死刑執行人」という題で『ジュルナル・ド・パリ』に掲載される。そこには、「われわれの最も豊かな小説家の一人による」という署名があるが、これは暗にバルザックを指すのに用いられたもので、彼の文章であることがほぼ確実視されている。先に引用した、「無実で、不幸で、迫害された公証人のチャンピオン」にも、同様の署名が付されていた。

では、バルザックはシャルル＝アンリ・サンソンという死刑執行人を、どのような人物として捉えているのだろうか。『サンソン回想録』を補足資料としながら、『恐怖時代の挿話』を見てみよう。

この短編小説がバルザックの作品のなかで異質なのは、実在した人物が主人公になっているという点である。ルイ十六世を処刑したサンソンには、虚構の人物では代替不可能な、絶対的で唯一の歴史性がそなわっている。バルザックは『サンソン回想録』に取りくむ過程で、この歴史性を小説に転用する発想を得たのだろう。

死刑執行人であったということだけが、サンソンの悲劇性を生みだしているのではない。彼が苦しんだのは、フランス革命によって社会が一変しながら、革命前と同じように、革命後も死刑執行人であり続けなければならなかったからである。もちろんその境遇に変化がなかったわけではない。何よりもギロチンの発明によって、サンソンは文字どおり処刑を執りおこなう人間から、機械を操作する人間に変わったのである。ギロチンが介在することにより、サンソンと死刑の関係は、以前より間接的なものになったと言えよう。また、その職業名も、革命によって変わった。バルザックは『恐怖時代の挿話』で、冒頭からずっと謎に包まれていた男の素性を明らかにするとき、こんな風書いている。

「あれは誰なんだ、あの……」

「死刑執行人 (bourreau) だよ」と、ロガンは『重大な行為の執行者』(exécuteur des hautes œuvres) を王政時代の名称で呼んで答えた。(VIII, p.450)

何よりも大きな変化は、国王を処刑する立場にまわってしまったことである。自分がかつて仕え、しかもきわめて大事な存在であった者の首を刎ねねばならなかったという悔恨が、『恐怖時代の挿話』という物語を成立させている。『エル・ベルドゥグ』で、長男が家族を処刑するよう強制されるのは、サンソンの物語の変形ともみなせるだろう。

サンソンと国王のあいだにあるのは、単なる上下関係ではない。国王も死刑執行人も、世襲であるという点で、相似的なのである。『サンソン回想録』には、こんな一節がある。

社会が私に対して作ったのは、このような身分である。不幸な身分であり、それへの非難は消えることなく、家系のなかで代々続いてゆく。ちょうど、王位継承権が王朝において続くように。そうすると、私は低い所にいる王なのだろうか。しかし、それならば、

高い所の王と低い所の王の隔たりは、何と大きなものだろう⁽⁸⁾。

『恐怖時代の一挿話』におけるサンソンの立場は揺れている。ある意味で彼は、国王の代理人である。サンソンは言う。「おそらく私だけが、法律 (Loi) よりも上にいるのでしょうか。なぜなら王 (Roi) はもはやいないのですから。」(VIII, 442) しかしその一方で、彼はフランス革命を体現する存在でもある。「司祭と二人のあわれな修道女の祈りのなかには、君主政のすべてがあった。しかしおそらく、大革命も、この男によって代表されていただろう。」(VIII, 445)

ただバルザックは、サンソンがルイ十六世のためにミサをあげるよう求めるという設定により、アンシャン・レジームのもうひとつの柱である宗教性を強調している。死刑執行という苛酷な行為は、国王の権力と宗教の権威の双方によって支えられていなければならない。『サンソン回想録』で、シャルル＝アンリ・サンソンは父親から次のように言われる。

私はまもなく、自分のことを、善き神が犯罪者を罰するために使う道具だと考えるようになった。われわれは本当に重大な行為を執行している。というのも、ある人間の生命を、本来の死期の前に断ち切ってしまうのは、神の権利を侵害することなのだ。お前は別の意味での国王だ。玉座の上の国王というのは、処刑台でのお前なのだ。お前は社会全体を代表している⁽⁹⁾。

バルザックは『『人間喜劇』序論』で、「宗教と君主政という、ふたつの永遠の真理の光に照らされながら書いている」(I, 13) と宣言した。バルザックの描くサンソンもまた、職業として遂行していることは大きく異なるが、この「ふたつの永遠の真理」を拠り所としているのである。そして『恐怖時代の一挿話』の最後で神父が口にする、「フランスのどこにも心がなかったときに、鋼鉄の刃だけが、心を持っていたのだ」(VIII, 450) という言葉は、バルザックのアンシャン・レジームにたいする意識と明らかに重なりあっている。かつての理想が、革命後の社会において変質してしまったことへの苦しみや憤りを、バルザックはサンソンに仮託して表現していると考えられることもできるだろう。

バルザックとサンソンのつながりは、文章だけではない。『恐怖時代の一挿話』と『サンソン回想録』の死刑執行人は、シャルル＝アンリ・サンソンだが、バルザックは一八三四年四月二六日に、このサンソンの息子で、マリー・アントワネットの死刑執行人であるアンリ＝ニコラ＝シャルル・サンソンと、さらにその息子のアンリ＝クレマン・サンソンと会い、夕食をともにしている。顔合わせのセッティングをしたのは慈善家バンジャマン・アペールで、そこにはヴィドックやデュマも同席していた。アペールは回想録で、「バルザックとアレクサンドル・デュマは、ヴィドックや二人のサンソンとの会話で、機智に富んでいた」⁽¹⁰⁾と書いている。

このアンリ＝ニコラ＝シャルルが、『娼婦の栄光と悲惨』に登場する。バルザックはここで、サンソン家の歴史を説明し、この死刑執行人の様子を描いているが、その記述には

出会った時の印象が反映しているだろう。

この男において、中世からの死刑執行人の血筋を示す唯一のしるしは、手の驚くほどの厚みと幅広さだった。その上、十分な教育があり、市民および選挙権保有者という自分の資格を大事にし、噂によれば庭いじりに熱中しているというこの背が高く太った男は、小声で話し、落ちついた物腰で、口数はごく少なく、広く禿げ上がった額をしていて、死刑執行人よりもイギリス貴族にずっと似ていた。(VI, 859)

このサンソンはまた、「大きな暖炉に背中をもたせかけてずっと立っていて、犯罪者に身支度をさせ、グレーヴ広場に断頭台を立てるようにとの命令を待っていた。」(VI, 865)『恐怖時代の一挿話』のシャルル＝アンリ・サンソンと『娼婦の栄光と悲惨』のサンソンの違いは鮮明である。前者におけるサンソンは、暗闇のなかに身を隠してミサに参列しなければならなかった。しかし恐怖政治は過ぎさった。『娼婦の栄光と悲惨』に描かれているのは、黙々と職務をこなす死刑執行人の姿であり、その父親が感じなければならなかった身を引きさくような苦悩はみじんも見られない。

死刑の宣告

では、バルザックは死刑について、どのように考えていたのだろうか。『現代史の裏面』で、ゴドフロワはふとこう口にする。「でもあなただって、社会は死刑なしには存続できないことは、お認めになるでしょう。明日にも首を刎ねられるあの二人も……」(VIII, 281) 話の途中で彼は口をふさがれる。死刑やギロチンの話題は、ラ・シャントリー邸ではタブーであった。何も知らない新参者のゴドフロワは、不用意にこのタブーを破ってしまう。そしてこの出来事が、ラ・シャントリー夫人をめぐる謎の解明へのきっかけとなる。彼女の慈善活動の裏には、身内が処刑されたという事実が隠されていた。

ユゴーが「死刑廃止のための(…)弁論」⁽¹¹⁾だという『死刑囚最後の日』について、バルザックは「無実で、不幸で、迫害された公証人のチャンピオン」でこう書く。「昨日も私は、『死刑囚最後の日』という、この素晴らしい本を読んでいた。これは私にとっては小説ではない。」⁽¹²⁾『人間喜劇』では、『モDEST・ミニヨン』、『田舎ミュージ』そして『村の司祭』に、この小説についての言及がある。重要なのは、『村の司祭』における次のような一節である。「『死刑囚最後の日』は、暗い哀歌であり、社会の大きな支えである死刑に対する無益な弁論だが、ちょうどこの状況にあわせたかのように、少し前に出版され、どの会話でも話題になっていた。」(IX, 696, 強調は引用者)。社会における死刑の意義を認めているという点で、この文章はゴドフロワの発言と共通している。

ただ、死刑という極刑があるために、それを免れようとして、本来ならする必要のなかった行為にまで及んでしまうという弊害があることも、バルザックは指摘している。『娼婦の栄光と悲惨』には、こう書かれている。「これらの男たちは、証拠を消すためにのみ人を殺す(これは死刑廃止を求める人々が引きあいに出す理由のひとつである)。」(VI,

847)

バルザックはユゴーのように、制度としての死刑を真っ向から否定しているわけではない。しかし、同時にバルザックの小説が示しているのは、死刑を宣告する側が、完全な真実や正義を体現しているのではないということである。言いかえれば、『人間喜劇』において死刑囚とは、絶対的な悪ではない。そこから、バルザック独特のドラマが生みだされてくるのである。

たとえば『娼婦の栄光と悲惨』で、検事総長のグランヴィルは言う。「親殺しのような恐ろしい犯罪が、ある県では無罪の評決を受ける。ところがほかの県では、いわば普通の犯罪が死刑という罰を受けている。」(VIII, 889-890) また同じ小説の第三部から第四部にかけて、リュシアン・ド・リュバンプレが逮捕され、ヴォートランとともにコンシエルジュリーに収監される。彼らを担当する予審判事カミュゾと夫人は、こんなやりとりをする。

「もしあなたが、あのリュシアン・ド・リュバンプレという気取り屋を重罪裁判所に送り、不利な判決が下りるようにできるなら、あなたは高等裁判所の評定官になれるわ」と、彼女は夫の耳にささやいた。

「どうやるというんだい。」

「デスパール夫人は、あのかわいそうな若者の首が落ちるのを見たいのよ。」(VI, 720)

カミュゾ夫人にとってリュシアンの裁判は、司法界で夫が昇進するための手段にほかならない。バルザックにあっては裁判が、司法にかかわる人間の生態を描くことと結びついている。

司法官とは、死刑判決をひかえて苦しむ人間でもある。検事総長のグランヴィルは、司法官と死刑囚の関係を、こんな言葉で説明している。

(…) 司法官にとって、机の前に座り、冷静に、「四時に首を切りおとせ。生命と力と健康に満ちた神の被造物を無き者にしろ」というのは、まったく困難なことだ。しかし、それが私の義務なのだ(…)。苦悩に打ちのめされても、私は断頭台を立てる命令を出さねばならない。死刑囚は司法官が、彼らに匹敵する苦しみを味わっていることを知らない。今、復讐する社会である私と、償うべき罪である彼は、たがいに一枚の紙で結びついている。われわれは、ふたつの顔を持つ同一の義務、法の刃によって、ほんの一瞬、縫いあわされたふたつの存在なのだ。(VI, 889)

このグランヴィルの息子が、『村の司祭』でのタシュロンの裁判に、次席検事としてかわることになる。ヴェロニックに想いを寄せている彼は、グララン家を訪れて、裁判の経過を登場人物そして読者に伝える役割を果たしている。ヴェロニックは、自分が事件に関与していることは隠したまま、グランヴィルに裁判で負けるよう求める。

「あなたが彼の首を刎ねるように命じるとき、私はお産をするのですよ。」
 「私に法律が変えられるのでしょうか」と、次席検事は答えた。
 「まったく、あなたは人を愛せないんですね」と、彼女は目を伏せながら言った。(IX, 694)

タシュロンの命を救うために何もしてくれなかったグランヴィルを、ヴェロニックは憎みつづけるが、死の間際、会いに来た彼に、許しを与える。ここでは明らかに、人間の真の感情と司法の判断のあいだに上下関係が設定されており、後者は前者にたいして副次的なものとして示されている。ここにバルザックの司法に関する考えを読みとることもできるだろうが、見のがしてならないのは、『村の司祭』におけるヴェロニックとグランヴィルの関係が、『現代史の裏面』のラ・シャントリー夫人と、その娘たちを断頭台へ送ったブルックの関係によって反復されているという点である。彼女は彼に言う。「今でも目に浮かぶ、断頭台に立つルイ十六世とマリー・アントワネットに免じて、エリザベート夫人に免じて、私の娘に免じて、あなたのお嬢様に免じて、イエス様に免じて、あなたを許してさしあげます。」(VIII, 412) 愛する人間を死刑によって奪われた者は、司法を恨み、拒絶する。しかしその感情もまた、最終的には乗り越えられるという物語を、バルザックはふたつの作品で提示しているのである。

小説のなかでギロチンが果たしている役割は、それが暴力的な装置であるがゆえに、普通ならば隠されている事柄を、唐突に、否応なく明るみに出すということである。そこで見えてくるのは、人間にとって本質的な何かである。ボネにとっても、司法の判断は二次的なものにすぎない。「私は、人間の裁きに対する関心で動いているわけではありません。(…)私の役目は、神のもとに一人の魂をお返しすることです。」(IX, 738)

『村の司祭』において、タシュロンの処刑によって浮かびあがるもうひとつの重要な問題は、家族や社会のあり方である。タシュロンの犯罪によって、「祖父、祖母、娘たち、その夫、父、母といった、タシュロンという名を持つすべての者」(IX, 721-722)は、モンテニャックを去る。バルザックはこの行動を、いまや失われてしまった理想の表れとみなす。

新しい法律によれば、父親はもはや息子に対して責任を負わず、父親の犯罪はもはや家族の名誉を汚すものでもない。父親の権力をひどく弱体化させたさまざまな親権の解除と一致する形で、この制度によって現代社会をむしばむ個人主義は勝利をおさめた。(IX, 722)

バルザックの考える家族関係の形からすれば、父親を代表とする家族が、身内の犯罪の責任をいっしょに背負うのが当然であった。彼が批判する、新しい時代特有の個人主義的な家族関係を、革命後の社会がめざすべき方向として示したのが、ほかならぬギヨタンその人であったというのは、はたして偶然なのだろうか。ギロチンの考案者は、こんな法案

を残しているのである。

第二条 軽罪も重罪も、個人的なものであるから、犯罪者への刑罰や何らかの恥ずべき有罪判決は、その家族にいかなる不名誉の烙印を与えるものではない。(…)

第五条 何びとも、市民を、その親族の一人が受けた刑罰や何らかの恥ずべき有罪判決ゆえに責めることはできない。(…)⁽¹³⁾

しかし、タシュロン一家は不名誉に耐えられず、アメリカへ移住する。このエピソードは、それで終わるわけではなく、のちの小説の展開において少なからぬ意味を持っている。タシュロンの妹ドニーズは、後年モンテニャックに戻り、ヴェロニックの息子を見て、それが兄の血を引いていることを見ぬく。そして彼女は、モンテニャックの開発に尽力したジェラルドと結婚することになるだろう。

ギロチンは、死刑囚に死をもたらすとともに、人と人とのつながりを強引に断ちきってしまう。しかしバルザックにおいて、ギロチンはまた、人と人との結びつきがどうあるべきかを逆説的に照らしだす装置としても機能している。罪を犯し、処刑されるのは本来恥ずべき状況だが、周囲の人間を含めて犯罪者の側にいる者たちが、同時に人間や社会にとっての理想を示すという、転倒した物語が構成されているのである。

死刑囚の姿

『娼婦の栄光と悲惨』には、テオドール・カルヴィという死刑囚が登場する。ヴォートルンのおかげで彼は処刑を免れるが、すでにいくつか文章を引用しているように、この小説の第三部と第四部では、監獄と死刑が重要なテーマとなっている。死刑囚、執行人、検事は、その立場ごとに別々の形で死刑にかかわりを持つ。またバルザックは、死刑にまつわる隠語についても言及している。

一七九〇年、ギヨタンが、人類のために、死刑という刑罰によって生じるすべての問題を解決し、迅速に事を処理する機械を発見した。すぐさま徒刑囚と元徒刑囚たちは、かつての制度である君主政の境界と、新しい裁判の境界に位置するこの機械を調べ、それを「しぶしぶ登る僧院」Abbaye-de-Monte-à-Regretと呼んだ。また彼らは鋼鉄の刃が描く角度を研究し、その作用を言いあらわすのに、「刈り取る」faucherという動詞を見つけた。(VI, 829)

では、処刑そのものは、小説のなかでどのように描かれているのだろうか。その最も具体的な記述は、『人間喜劇』に属する作品ではないが、『アネットと罪人』のアルゴウの処刑に見られる。彼の死刑執行が決定され、集まった群衆の様子が描かれたり、アルゴウが現れて、神父と会話をする事などが、細かく語られている。

そうこうするうちに、護送車が断頭台に到着した。アルゴウはそこに上がり、目を天に向けて、モンティヴェール師に言った。「アネットのことをお願いします！彼女は、ああ、彼女は、天使なのです。さようなら。」(…)

恐るべき光景が一瞬のうちに終わると、群衆は静かに移動しはじめた。

「一撃をくろうとき、あいつは『アネット』とつぶやいていたな」と、断頭台の一番近くにいた男が言った⁽¹⁴⁾。

『人間喜劇』中の作品では、すでに述べたように、『ふくろう党』や『エル・ベルドゥゴ』で首が刎ねられるが、それはギロチンによるものではない。ギロチンを用いた処刑に関しては、残虐さを前面に押し出すような描写はないと言っていい。二十一歳で処刑されたラ・シャントリー夫人の娘については、過去の回想という形で言及されている。『暗黒事件』のミシュエの処刑は、こう記述される程度である。

彼はグージェ師が腕を貸すのを断り、堂々として決然たる態度で断頭台まで歩いていった。板に横たわるとき、フロックコートが首のところまで上がっているから、襟を折ってくれと、死刑執行人に頼んだ。「この服はお前さんのものになるのだから、傷物にしないようにな。」(VIII, 683)

自分がローランス・ド・サン＝シーニュたちのためにしたことに満足しているかのようになり、従容として死刑にのぞむ様子が強調されている。『村の司祭』でのタシュロンの処刑もまた、キリスト教の勝利の結果として、淡々と語られる。

その翌々日、市の日に、ジャン＝フランソワ・タシュロンは、町の信心深い人や政治にかかわる人たちの望みどおりに、処刑場へ引かれていった。謙譲と信仰心の模範たるにふさわしい態度で、彼はボネ氏が震える手で差し出した十字架に、熱意を込めて口づけした。(…)彼は悔悟し、赦されて、キリスト教徒として死んだ。(VIII, 739)

物語において重要なのは、処刑という出来事そのものではない。処刑は、罪を犯し、法の裁きが下された以上、避けてとおることのできない帰結にすぎない。作品にとってより本質的なのは、生きている段階での死刑囚の姿であり、また彼あるいは彼女と周囲の人々を取りむすぶ関係である。

ニコル・モゼは、バルザックが『村の司祭』のなかで、『死刑囚最後の日』と『赤と黒』を「リメイクしている (refait)」⁽¹⁵⁾と指摘している。たしかにバルザックの小説でも、ユゴーの作品と同じように、裁判から処刑にいたるまでの死刑囚の心理が語られている。またタシュロンは、ジュリアン・ソレルと同じように人妻を愛し、処刑によってその関係を引きさかれる。ただ設定が似ているとしても、作品の内容や書かれ方、あるいは処刑の扱いには少なからぬ相違がある。「リメイク」によって生じている元の作品との隔たりこそが重

要なのである。これらの作品を比較して、『村の司祭』の特徴を見てみよう。

ユゴーの小説との違いははっきりしている。『死刑囚最後の日』は、一人称による語りで書かれている。処刑の直前までの出来事や感情が、死刑囚本人の視点のみをとおして綴られる。もちろんそれは、現実にあるようなことではない。厳しい監視下におかれた囚人がこまごまと文章を書くことの不可能性を糊塗しようとして、「何度もためらったあげく、やっと私に、インク、紙、ペンと、夜用のランプをくれた」⁽¹⁶⁾などと記述されたりもしているが、このような配慮は表面的なものにすぎない。むしろ、語りの非現実性が死刑という極限状況と重なりあっていることが、この作品に独特の緊張感をもたらしているだろう。

一方、『村の司祭』のタシュロンの心理や感情は、まわりの人々とのやりとりをとおして示される。『死刑囚最後の日』はモノフォニックなのに対して、『村の司祭』はポリフォニックに書かれていると言ってもいい。そうであることによって、バルザックの小説には、死刑囚の感情とは別のさまざまな要素が、どっと流入してくるのである。

裁判所はタシュロンの精神状態を考慮して死刑を延期し、ボネや家族が彼と面会することになる。この設定は、物語の展開において決定的な意味を持っている。まず、死を前にしたタシュロンが、母親や妹に思いを吐露する。ボネは彼を「キリスト教徒として死ぬ」ように導き、作品の柱のひとつである宗教という主題を持ちこむ。そして、読者には何も知らされないが、タシュロンは隠した金のありかと犯罪にかかわる重大な秘密を打ちあける。

タシュロンは、死刑を目前にして取りみだす。「いやだ、いやだ。僕は生きていたい。お母さん、僕の身代わりになってください。着ている物を僕にください。そうすればうまく逃げだせるでしょう。」(IX, p.739) 彼の犯罪は、ヴェロニックへの愛ゆえであり、処刑とは彼女との永遠の別れを意味している。タシュロンの思いの強さを示すためにも、この錯乱の表現は必要であった。彼はボネの力で冷静さを取りもどす。この展開は、男性と女性という違いはあるものの、『谷間の百合』でモルソフ夫人が最後の場面で見せる姿と共通している。「生きていたい」(Je veux vivre) というのは、彼女が口にする台詞でもある。(IX, 1202)

では、『赤と黒』との違いはどこにあるのだろうか。タシュロンはジュリアンではなく、ヴェロニックとレナール夫人の性格は異なっている。したがって、若者と人妻の恋愛という設定はいっしょでも、ふたつの作品はそれほど似てはいない。

決定的な相違点は、作品全体の構造における処刑の位置づけである。『赤と黒』の物語は、ジュリアンの処刑と、その三日後のレナール夫人の死によって終わる。それにたいして『村の司祭』では、タシュロンの処刑は、作品の中間あたりで出来る事件である。ニコル・モゼは、キ・ウイストの草稿研究に依りつつ、「一八四一年の『村の司祭』においては、革命的な意味を持つ変化によって、タシュロンの死は始まりとなる」⁽¹⁷⁾と指摘する。『村の司祭』のみならず、バルザックの作品を理解するうえで、この点はきわめて重要である。

というのも、おなじことが、ここでもまた『現代史の裏面』で反復されているからである。ラ・シャントリー夫人の人生は、娘たちが処刑されるまでと、それ以後に二分されて

いる。『村の司祭』では、物語の展開が叙述と同時進行しているのにたいし、『現代史の裏面』では、過去の出来事が回顧されているという違いはたしかにある。しかし、愛する者がギロチンで処刑されたことが、その後の人生を大きく変えるという点において、ふたつの作品は共通している。

処刑が執行される物語で、死刑囚に近い存在として、美德をそなえ、精神的に高貴な人物が登場するという逆説的な特徴が、バルザックの小説にはある。『暗黒事件』のローランスとミシュール、『アネットと罪人』のアネットとアルゴウの関係も、おなじ系譜に属している。

それはバルザックにとって、死が単なる終わりを意味するのではなく、その死に接する者を変貌させる力を持つものとして描かれ、新しい物語を発動させるからにほかならない。たしかに、『ゴリオ爺さん』と『谷間の百合』は、主たる人物の死で結末を迎える。しかしわれわれは、ほかの小説において、ゴリオとモルソフ夫人の死によって別の人間となったラスティニャックやフェリックス・ド・ヴァンドネスと出会うのである。人間のタイプは異なり、同一の作品内での展開だが、ヴェロニックやラ・シャントリー夫人に生じる変化にも、おなじような創造力が働いているのではないだろうか。

しかも、ギロチンによる死は、老いや病気による普通の死ではない。それは暴力的な死であり、理不尽にもたらされる死でもある。そして犯罪という反社会的行為とかかわっている以上、死刑囚と近い人間に、懺悔や自責など、いっそう強い感情をもたらす。愛情や惜別の念も含めて、そうした激しい感情の表現を可能にするという意味でも、ギロチンは、バルザックにとって欠くことのできない装置であった。

- (1) バーバラ・レヴィ、『パリの断頭台』、喜多迅鷹、喜多元子訳、法政大学出版局、1987年、p.88.
- (2) 序文等も含め、*La Comédie humaine*, dir. P.-G. Castex, Bibliothèque de la Pléiade, 1976-1981, 12 vol.に収められている作品については、引用文の後に巻数と頁数を記す。
- (3) « Le Champion du notaire innocent, malheureux et persécuté », *Œuvres diverses*, t.II, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1996, p.620. この文章は、一八三九年十月に『ジュルナル・ド・パリ』に発表されたが、書かれたのは一八二九年頃だと推定されている。プレイヤー版のNotice (p.1430-31)を参照。
- (4) ジュリア・クリステヴァ、『斬首の光景』、星埜守之、塚本昌則訳、みすず書房、2005年、p.157.
- (5) 特に以下の論文は、この主題の重要性を強調している。Roland Chollet, « Trophée de têtes chez Balzac », *L'Année balzacienne*, 1990; Lucette Besson, « Le décapité de Montyrat », *Le Courrier balzacien*, 4^e trim. 1987.
- (6) *Œuvres diverses*, t.II, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1996の、*Mémoire de Sanson*へのNoticeに全文が掲載されている。
- (7) *Ibid.*, p.1409.

- (8) *Mémoire de Sanson, Œuvres diverses*, t.II, p.445.
- (9) Ibid., p.545.これは、「Les deux bourreaux」に含まれている文章である。
- (10) Benjamin Appert, *Dix ans à la cour du roi Louis-Philippe et Souvenir du temps de l'Empire et de la Restauration*, Berlin : Voss; Paris : Jules Renouard, 3 vol, 1846, t.III, p.12. Marcel Bouteron, « Un dîner avec Vidocq et Sanson », *Etudes balzaciennes*, 1954, p.133より引用した。
- (11) Victor Hugo, *Le Dernier jour d'un condamné*, Préface de 1832, Gallimard, Folio classique, 2000, p.144.
- (12) « Le Champion du notaire innocent, malheureux et persécuté », op.cit., p.620.
- (13) Daniel Arras, *La guillotine et l'imaginaire de la Terreur*, Flammarion, 1987, p.26より引用した。
- (14) *Annette et le Criminel, Premiers Romans*, tome II, Robert Laffont, 1999, p.667-668.
- (15) Nicole Mozet, « Balzac, le prix Montyon et la guillotine (*Le curé de village*) », *Balzac au pluriel*, PUF, 1990, p.194.
- (16) *Le Dernier jour d'un condamné*, op.cit., p.50.
- (17) Nicole Mozet, op. cit., p.196.